

新潟県立近代美術館 令和3年度評価シート

中間・最終報告: 取組終了 取組継続中  
 総評内容: 評価すべき点 検討課題

分野	重点的な事業目標	令和3年度の取組	事業目標・取組に対する達成状況		自己評価	協議会評価	
			中間(12月31日現在)	最終(3月31日現在)	総評	総評	
展覧会	新型コロナ対策を考慮しながら、入館者が期待できる企画展と当館のオリジナルのあるコレクション展を開催し、当館のコレクションの独自性を広く県民にアピールしていく。	「よみがえる正倉院宝物展」では文化財保護の意識を高める契機とする。	■模造製作についてその意義、その手法等の解説映像や、各種工程の展示、解説パネル等によって観覧者も理解しやすい展示ができた。 ■展示品の《銀薫炉》の模造製作者、玉川宣夫氏と市川正美氏の鼎談(ていだん)や、市川正美氏の彫金制作映像の放映により、理解を深められた。	■取組終了	◎正倉院展は展示作品全てが再現模造(複製品)であり、当時に迫る今日の技術を紹介し文化財保護の意義を入館者に認識してもらうことを開催目標の第一義とした。アンケートでは86.6%の方々が満足され、正倉院事務所長の講演会でも39人全員、鼎談でも47人全員が良かったと回答しており、その意義は充分に理解されたと思われる。 ◎高畑展の巡回先では展示空間としては狭い箇所や、映像コーナーによる滞留の長時間化などがあったため、監視員の位置や映像コーナーの設置箇所を変更するなど順路を再検討し、新型コロナウィルス対策に配慮した展示とした。 ▲いずれの企画展も新型コロナウィルス感染拡大に伴う、他県との往來の制限や解除、感染者数の増減が来場者数にどのように影響を与えるのかなど、事業計画策定時期には見通すことが困難。 ◎今後の企画展計画については新しい主務課と意思疎通を図りながら数年後を見据えて計画の策定を図りたい。	◎事業や展示の目的の明確化、また、他の展示との関連や館の思いなどの明確化により観覧者の意識や満足感を高めることができ、取組を評価する。 ◎久保田成子展は展示も工夫し楽しめた。世界に知られる県出身作家が、新潟で紹介できた意義はあったと思う。コロナ禍下での来館者数には残念だが、その後もコレクション展で紹介され、良かった。今後も折々に紹介してほしい。	
		「高畑勲」展では新型コロナ対策を考慮しながら、鑑賞に際してスムーズなオペレーションが行えるよう進めていく。	■高畑勲展の代表作を通じてジブリ作品だけでなく、東映動画やT.Vシリーズまで手厚く紹介できた。来館者からも日本のアニメーション文化を深く理解できたという感想があった。親子三世代に喜ばれ、コアなアニメファンを動員できたという一定の成果があった。来館者の入館オペレーションについても館内の人員配備や駐車場整理などを計画的に行い、新型コロナウィルス対策にも配慮した。 ■ステッカーを活用して館ツイッターのフォロワーを増やすキャンペーンや、ショップの来館者数を増やす取組ができたことは収穫だった。また、新潟市新津美術館で同時期に開催された「富野由悠季の世界展」と「高畑勲展」の両方を鑑賞することを提案するツールとしてもステッカーを活用した。企画展においては他館との協働の画期的な試みとなった。	■取組終了		▲県民は、やはり「本物」を求めていると思うので、予算的な問題もあるが「本物」を展示していくことが、美術館への来館者増や県民の期待に応えることにつながると思う。 ◎高畑展は相当な展示のボリュームだったが、レイアウトを工夫し、大勢の来館でもさほど密にもならず、じっくりと楽しめた。	◎正倉院展に関して、再現模造の技術に価値を見出すことは高尚だと思っただが、来館者が身近に作品を味わう良い機会になり、アンケートの回答の満足度から事業のねらいは達成されたかと判断する。また一方、高等学校と連携授業が行われ、高校生が美術館に行くきっかけ作りも繋がった。
		「三沢厚彦展」を含めた令和4年度全体の展覧会計画の策定を図る。	■昨年度から当館に共同開催についてのオファーがあった「平等院展」、昨年度、新型コロナ禍により中止を余儀なくされた「三沢厚彦展」の他、秋期に開催する展覧会として「ダリの版画展」を令和4年度の展覧会候補とした。	■年間を通して、バリエーションを見定めることが企画展実施の基礎案件となっている中、ようやくR4年度のラインナップを揃えることができた。		◎久保田展開催時の「POP ARTをめぐる旅」、高畑展時での高畑の愛した作家の展示、所蔵品の特色を活かした「生誕130年羽下修三」、「1920年代の美術」など、当初目標通りのテーマ展を計画的に実施することができた。 ▲コレクション展の入館者を増やす工夫が必要だと思われる。企画展、コレクション展が別料金のため、アンケートで反響はあったものの両方をみる来館者は少なく、リンクの効果が活かせなかった。	◎コロナ禍下で来場者数への影響は仕方がない。だが、緩和されつつある今後、評価の枠組みの見直しが必要かと思う。いかに県民に有意義で、未来に残せる展覧会を開催できるかが重要と思われる。そのための分かりやすい評価方法を先駆けて取り入れる検討も必要であろう。
コレクション展では、当館の特色や、同時期に開催している企画展とのリンクを図りながら、テーマ展を実施していく。	□昨年度はコロナ禍により、コレクション展の入館者数が伸び悩んだ。今年度は新型コロナ状況に大きな変化が無かったものの、入館者数は増加した。おそらく新型コロナがある中での「新しい日常」という状況が定着したものと思われる。また、アンケートをみると企画展とリンクした「POP ARTをめぐる旅」、東京オリンピックの開催に併せた「嗚呼東京」、また、当館の特色を生かした「ほっこりするアート」、「親と子のワクワク美術館」についての反響が大きかった。	■第4期(12月21日～3月21日)は企画展を開催していないこともあり、当館のコレクションの特色を活かした「小特集・生誕130年羽下修三」、「1920年代の美術」を開催した。	◎コレクショ展の入館者を増やす工夫が必要だと思われ。企画展、コレクション展が別料金のため、アンケートで反響はあったものの両方をみる来館者は少なく、リンクの効果が活かせなかった。	▲コロナ禍で来場者数への影響は仕方がない。だが、緩和されつつある今後、評価の枠組みの見直しが必要かと思う。いかに県民に有意義で、未来に残せる展覧会を開催できるかが重要と思われる。そのための分かりやすい評価方法を先駆けて取り入れる検討も必要であろう。			
教育普及等関連事業	当館の所蔵コレクションを活かした教育普及活動を強化する。	□コレクション展を扱った各活動の内容を整理保存し、継続・発展を可能にする。	□整理保存は継続中。学校団体に使用できるように、コレクション展でワークシートを作成したほか、コレクション展示室ロビーを「交流コーナー」として、「作品がおしゃべり!」「きかせて！感想コーナー」「私の一行ものがたり」を実施し、来館者に参加してもらった。同コーナーで現在は「あの人にも見せたい 私のお気に入り この作品」を実施中。	□これまで作成してきたワークシートや展示での発問、ワークショップでのクイズ問題など、全てを一覧表にまとめたファイリングを行った。	◎今後はファイリングを活かして展示回数が多い主要作品のための定番ワークシートの作成を進めていく予定。現在、その他の教育普及関連の活動記録も保存箇所を定め、過去例を参照できるよう整えている。	◎コロナ禍しながら、教育プログラムの作成や出前講座の充実、多さは驚きで充実してとてもよい。美術館が近くにない子供たちの関心へのきかけになり、また生涯学習としては居住地や年齢等にかかわらず豊かな学びができることが望ましく、元作家の協力も得るなどして無理のない範囲で地産や情報発信の充実も期待したい。	
	学校向けの出前講座のメニューを充実させ、新潟県のコレクションをアピールする。	□昨年度に中心に行った対話型鑑賞による内容に加え、当館の所蔵品を中心とした小学校下学年向け、および上学年向けのプログラムそれぞれ1種類ずつを開発、教育普及担当職員で共有し、実施した。従来の対話型鑑賞やキャリア教育に関するもの、デザインや現代美術に関する専門的内容、地域の画家に関するものなど、今年度は、教員対象のものを除き、21件1,070名に対して出前講座を実施、これまでで一番多い数となった。教員向けの研修会は、館内外を含め、5件68名であった。	□学芸課の教育普及担当職員全員が実施可能な小学生向けプログラム2件を作成、実施した。	◎出前講座については令和4年度向け、中学生を対象としたプログラムを作成中である。	◎建物の特徴を利用した観覧者参加型の交流コーナーは、観覧の満足度をさらにアップさせるものとして、今後も工夫しながら取り組んでいってほしい。		
調査・研究、収集・保存、発信	令和4年以降の展覧会を見据えて、各企画展に反映できる調査・研究を行う。【H29～】	当館の開館30周年を踏まえた、当館の所蔵品に関連した「ナビ派」あるいは「ジャポニスム」等の海外展についての、可能性を含めて検討していく。	□ジャポニスムに関連した展覧会については、開館30周年にあたる令和5年の実施も視野にいれていたが、新型コロナの影響により令和6年以降に改めて仕切り直す方向で検討している。	□開館30周年に予定していた事業は令和6年に「モリス・ドニ展」として、また新型コロナの影響が続くことも考慮して、当館のコレクションを活かした形の自主展として企画変更を行った。	◎今後は内容を精査し他館との協力も考慮しながら調査・研究を進めている。	◎企画展に向けての調査研究が様々な困難を乗り越えて進められていて、評価できる。県民も期待しているので頑張ってください。	
	令和4年以降の展覧会を見据えて、各企画展に反映できる調査・研究を行う。【H29～】	令和5年度に共同開催を検討している3館で「ベルギーと日本展」に関する調査や企画検討を含めて進めている。	□「ベルギーと日本展」については、巡回開催を予定している他館とのリモート会議を重ね、展覧会企画、内容、予算の検討を進めている。	□R4年に入って、さらにオンラインミーティングを重ねている。	◎「ベルギーと日本展」について、本年度末より作品借用先との交渉も行っており、今後も実施に向けて調査・研究を進めていく。	◎様々な事業をこなす忙し中、収蔵品の資料整理は、なかなか時間がとれず、後回しになる傾向があるが、計画的に進めることができている、とても評価できる。今後もこのような収蔵品の基礎的な調査研究を継続してほしい。	
	当館所蔵作家、新潟県関連ゆかりの作家の調査・研究を行う。【H29～】	令和4年度末の開催を含めて、「橋本龍美展」についての検討を進めていく。	□次年度以降の展覧会を踏まえると、平成31年の予算段階で中止となった「橋本龍美展」は単独の内容では集客及びバリエーションを考慮した展覧会の実施は困難である。現在のところ令和5年の春期を開催時期としていることもあり、引き続き助成金、補助金の申請、併せて当館の所蔵作家による日本画展の開催を同時に検討していく。	□補助金、助成金については地元作家の顕彰を対象としたものが少なく、まだ受給の目処がたっていない。	▲原則バリエーションを考慮した予算編成が求められていることから、「橋本龍美展」のような自主企画展については目処が立ちにくかったが、新たな助成金の開拓や同年開催の他の企画展を考慮しつつ、今後の開催に向けて調整を進めている。	▲新潟県関連の作家の展覧会として、令和3年度から開催の「久保田成子展」は評価するが、生前に実現しなかったことによる本人からの解説や考え方について知る機会を逸したことは残念である。新潟県関連の作家について、予算面でも困難と思うが、万代島美術館と共同で、今、生きて活躍している作家や近年逝去した作家の関係者の証言が得られる内に、調査・研究を進めて展覧会を実現して欲しい。	
	当館資料の調査・整理を行う。【H30～】	亀倉雄策資料、江口草玄資料等の整理を進める。	□江口草玄の資料整理は継続中である。また一部については紀要等に掲載する予定である。 □亀倉資料については万代島美術館での資料整理が進んでいる。	□本年度調査はほぼ予定通り行うことができた。	◎江口草玄調査、亀倉資料の整理については今後も継続して続けていく予定。	▲県関連作家の展覧会については、地元新聞社等ともうまくタッグを組むなど、低予算でも実施できると良いと思う。民間の助成金には、ユニークな切り口のタイトル申請してみるなど、県関連作家展開催の方策が見つけてほしい。 ▲専門学術誌での発表のみでなく、HPや新聞等における市民に向けた情報発信に一層努力してほしい。	

新潟県立近代美術館 令和3年度評価シート

中間・最終報告:  取組終了  取組継続中  
 総評内容:  評価すべき点  検討課題

分野	重点的な事業目標	令和3年度取組	事業目標・取組に対する達成状況		自己評価	協議会評価
			中間(12月31日現在)	最終(3月31日現在)	総評	総評
環境・施設	施設設備の修理・補修を行う。 【H22～】	通常年度に必要な修理箇所について、文化行政課を中心にあらかじめ協議を進める一方、令和4年度のミュージアムショップの委託先についても検討を進める。	<input type="checkbox"/> 新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、館内トイレの洋式化及び洋式トイレの温座化、洗浄便座化工事を進めている。また、機器の老朽化に伴い、電話交換設備及び館内電話端末機の更新、多機能化を行った。 <input type="checkbox"/> ミュージアムショップについては、恒久的な店舗出店までは実現しなかったものの、本年度は「正倉院展」及び「高畑勲展」においてショップを開設することができた。次年度以降についても、現在出店意欲のある事業者と交渉を行っているところである。	<input checked="" type="checkbox"/> 懸案であった電話交換設備及び館内電話端末の更新、多機能化と館内トイレの洋式化(一部次年度)は完了した。	◎洗面所箇所については来館者へのサービスが向上した。今後は他の修理箇所についても検討していきたい。  ▲ミュージアムショップについては、次年度の「平等院展」については出店目処がたった。継続的な出店については引き続き検討していく。	◎財政難の折、電話交換設備・端末の更新・多機能化、トイレの洋式化など、来館者への基礎的なサービスや業務の向上を図ることができたのは本当に良かった。今後も毎年少しずつでも、老朽化等の改善に予算がつき、快適な美術館を維持できることを願う。  ◎ミュージアムショップの展覧会ごとに出店を確保しているところは評価する。常時の出店は昨今なかなか厳しいことと思うが、工夫しながら来館者の美術館体験の満足度向上を目指して引き続き取り組んでほしい。  ▲付帯施設(ミュージアムショップ、レストランなど)の充実、展覧会の魅力を広範囲に伝える強力なアイテムの1つだと思うので、是非、充実させる取組を継続して欲しい。また、県内企業とのテナント協力で集客を図るアイデアも取組む価値があるのではないかと。
協働組織	他館、大学、自治体などの協働の内容を精査し、より充実させるとともに、連携強化を図る。【H23～】	新型コロナ対策を考慮しながらも友の会との新たな連携について検討を進める。	<input type="checkbox"/> 従来までの連携事業、ボランティア活動や友の会の旅行などは新型コロナの影響で本年度も中止となっている。しかし、コロナ禍の中で、チラシ等には掲載を見送った解説会等、一部の事業については、友の会の通信網などを利用して、会員に周知するなど、当館事業に対する協力を得られている。	<input checked="" type="checkbox"/> 取組終了	◎美術館事業に対して友の会の通信網を活用するなどの新たな連携を行うことができた。今後も続けていきたい。	◎コロナ禍下において、できることに工夫を重ねて確実に取り組んだところを評価する。
		長岡造形大学との共催事業(亀倉雄策賞など)の再開を検討していく。	<input type="checkbox"/> 昨年度は新型コロナの影響により実施することができなかった 亀倉雄策賞展、JAGDA新人賞ではあるが、本年度は第23回亀倉雄策賞受賞記念 田中良治「光のグラフィック展 0 "Illuminating Graphics 0"」及び「JAGDA新人賞展2021 加瀬透・川尻竜一・窪田新展を12月4日～12月12日の会期で実施することができた。長岡造形大学の授業で利用して頂き、1週間の会期で424名の方から鑑賞頂いた。また、同時に受賞者の田中良治氏の講演会とJAGDA新人賞の講演(オンライン)も12月4日に実施することができた。	<input checked="" type="checkbox"/> 取組終了	▲新型コロナウイルスの影響から、友の会によるボランティア活動は実施できなかった。次年度についても目処がたっていない。  ◎昨年度は新型コロナの影響で長岡造形大学との共催事業の全てが停止となったが、本年度は長岡造形大学とJAGDAとの協議の結果、第23回亀倉雄策賞、JAGDA新人賞2021、記念講演会の3事業について再開することができた。	◎県民が興味関心をもつには、SNSも含めてメディアの発信が大きい。近代美術館の施策や方向性は工夫も見られていいと思うがゆえに、伝え方や内容について検討したり、関係機関の協力を仰いだりすることに力を注いでいくことが大切である。コアな企画や展示を目指していることから、美術館を訪れれば深いものを実感できるのは間違いないのだからどう組織を活用して広げていくかが大切である。
		長岡造形大学「オープンキャンパス」、「こどもものづくり大大学校」の講座を、美術館として参加する意義をあらためて検討し進めている。	<input checked="" type="checkbox"/> 「こどもものづくり大大学校」はリモートでできる活動が中心となったため、作品鑑賞を含む当館の講座を行えず、オープンキャンパスも実施されなかった。今度どのような方向になるか協議の場を持つなど要検討である。	<input checked="" type="checkbox"/> 取組終了	▲長岡造形大学の「オープンキャンパス」「こどもものづくり大大学校」は、本年度も新型コロナの影響で中止となり、結果として当館が協力する場が得られなかった。	◎館の事業を、友の会やボランティアに案内を出すのは、様々な年代の会員募集にも効果があると思うので良い取り組みだと思う。恒常的に行い、友の会やボランティアの特典としてPRすれば、相互にメリットができ、このような活動を増やしても良いかもしれない。
		新型コロナ禍ではあるが、新潟大学などの大学施設、新潟アートリンクと連携した実践的な活動の可能性を検討していく。	<input type="checkbox"/> 新潟大学での非常勤講師(個人的に受諾する形式)として、各学芸員がそれぞれオンライン授業等を選択して再開している。 <input type="checkbox"/> アートリンクの活動としては教育普及部門でアートリンク主催美術教育研修会として当館、万代島美術館、新潟市美術館、新潟市新津美術館の普及担当者による「学校×NIIGATAアートリンク・鑑賞と美術館-活用のための研修会」を7月26日に当館を会場として実施することができた。参加された教職員数は22名である。アンケートを見ると美術館の連携をもっと強めるべきという意見もあったが、学芸員と「鑑賞」に関心を持つ異業種や地域の異なる教員とが話すことのできる貴重な場となった。対話型鑑賞の体験によってその効果や意義を認識することができたなど、概ね好評であった。	<input checked="" type="checkbox"/> 新たに依頼のあった新潟大学大学院での「西洋美術史演習」を3回(1/12,1/19,1/21)に実施した。	◎本年度は毎年実施している新潟大学人文学部・美術史概説(各学芸員が個人で受ける形式)だけでなく、大学院の「西洋美術史演習」も担当するなど協力体制を強化した。	◎長岡造形大学、新潟大学との協働は、別の可能性も探り、学生が美術館への興味を持ち、好きになり足を運んでくれるようになると良い。
		小中学校の教頭会での、万代島美術館を含めた広報活動を計画的に行い、小中学校との連携を図る。【H30～】	<input type="checkbox"/> 教頭会については4月から12月までの期間、15箇所の県内の教頭会を回り、出前講座や当館と万美の展覧会について広報活動を行った。	<input type="checkbox"/> 教頭会での広報活動については1/13にも阿賀野市小学校で実施した。	◎教育普及事業「学校×新潟アートリンク」については次年度以降も会場を変更して実施する予定。  ◎教頭会での広報活動については次年度も当館と万代島美術館の企画展を中心に実施していく予定。	◎「学校×新潟アートリンク」等新たな試みを取り組んでいることが評価できる。また、可能性もあり、様々な切り口によるアートシーンの提示に挑戦して、話題作りをしてほしい。教員との接点を継続しているのは今後の教育普及活動のブラッシュアップのためにも大切にしてほしい。  ▲アートリンクについては取組がよく見えないように感じる。また、アートリンク、大学との連携など、多くの連携事業が、下越・中越地域に大きく偏っているため、県内の遠方地域との連携のための問題点、特に美術館鑑賞のための輸送バスの補助金の充実や人員不足など、全県を隈無く対象とするための施策を検討する必要がある。  ◎教頭会での広報活動など、学校教育現場への広報を熱心に行なっている点が評価できる。  ▲教頭会での広報活動について、学校現場の反応や、広報を行ったことによる成果について報告し、今後の方針を検討する材料にしてほしい。